

はじめに

「ん～、とうとう回ってきたか…」というのがプロジェクト X の原稿依頼を受けた最初の感想。昨年春、前年の技術士全国大会も無事終え、任期中だったが還暦を契機にと広報委員辞任の申し出をしたときのことである。「卒業論文ですから」というおことばに、「まだ仕事は卒業してないんだけどなあ」という思いを抱きつつ、これまでの自分の来し方を振り返るのも悪くはなかろうということでお引き受けすることにした。

大学を卒業以来、林業会社・造園緑化会社・建設コンサルタントとちょっとずつ仕事の対象を変えつつも、幸いなことに樹木に関わることを生業として38年間続けてくることができた。そのうちの1/3は施工屋として、残りの2/3は調査・計画・設計屋として、である。期間は短いものの施工に携わって経験したことが、現在の自分の技術に対する考え方を形成したのではないかと考えている。自分自身のエポック・メイキングなことはその間に起きている。いささか古い話が多くなり恐縮だが、振り返ることにする。

1. 植えた木が枯れる——造林の現場で

大学を卒業し、紋別市にある林業会社に就職。製紙会社系の緑化会社に就職予定だったが不況のために即時採用はできないということで協力会社に。いわゆる「帳場の若い衆」という形でいろいろな現場の見習いをすることになる。個人会社ではあったが林業全般を手がけている会社だったので、造林・造材だけではなく苗畑での育苗事業や林産物生産つまりキノコの栽培にまで携わることができた(と、今では懐かしそうに語ることができるが、当時は普通の会社や役所に就職した同級生たちを羨望のまなざしで見ている)。

現場に携わって間もないころ、とある造林の現場

で特定の植栽列だけが枯れているのに遭遇した。ある斜面が全部、というわけではなく、何列か置きに非常に枯れが目立つ列があるのだった。学生時代不勉強で、木の名前さえよく知らない私だったが、なぜだろうとない知恵を絞ってみた。環境条件、苗木は全て同じなのになぜ特定の列だけが…。後から「誰が植えたのだろう？」とふと考えてみると、思い当たる。「あっ、彼だ!」。植え方が雑なのである。

植え方が悪ければ木は枯れる、当たり前のことなのだが、こんなことは授業では教えてくれない。植えた木はほぼ全部育って、除伐して、間伐して…、と習うのだが、実際現場に出てみるとそううまくはいかない。苗木の質が悪い、植えた時期が悪い等々、教科書に載っているような環境条件がどうのこのよりも人為的なミスで枯れる方がずっと多いのだった。

「植えた木は枯れる、やり方がまずいと…」。これを体験したことが緑化屋としての原点となる。

2. 物語をつくる——記録映画の作成

大学を卒業した年、1977年8月、有珠山が噴火した。紋別では降灰もなく「ひとごと」のように過ごしてしまったが、その1年半後に当初就職予定だった造園緑化会社が有珠山の復旧工事に関わる見通しがついたので、ということで札幌に呼び戻された。3月下旬に引っ越し、そのまま荷物も解かず有珠山の現場に直行する。有珠山の外輪山、約140haをヘリコプターで緑化するという工事、4ヶ月ほど洞爺湖温泉に缶詰となった。当時全国で最大規模の緑化工事ということで数々のエピソードがあったのだが、ここではその後日談を書き記したい。

工事記録を映像で残すようにという上司からの指示があり、工事開始直後から8ミリフィルムで撮影していた。動画を撮影するというのは私も含めて担当者はほぼ初体験。今のように気軽に動画を撮影す

るなどということは皆無に等しい時代だったから、その結果は推して知るべし。しかし雪が降るころ、現場から戻ると次は編集して記録映画としてとりまとめるようにという指示が下りる。途方に暮れ、ススキノの某スナックでいろいろぼやいていると、そのママが当時ある放送劇団の団員で、「指導してくれる人を知っているから紹介してあげようか」ということになった。

さっそく上司ともどもその方をお願いに伺う。その方 T さんは某放送局の嘱託としてプロデューサーの指導などをしていて、当時 55 歳くらい。自分の父親よりも年上、私は 25 歳だった。撮り溜めたフィルムを記録映画という形に編集する、ということについては「いいですよ」と引き受けていただいた。ただし「あなた（つまり私）が主体なのだから、あなたがいろいろ考えて、物語をつくるのです」。はてさて、林学科をでて現場しか知らない私。何かから…。

最初はひたすら撮りためた動画を見ることから始まる。使えそうなシーンをチェックして記録する。また見る。つなぐ順序を考える。足りない映像を探す。時として写真から 8 ミリフィルムに複写する。そのうち、台本を書くように指示される。1 ページ 300 字詰めで上段に空白がある原稿用紙に絵コンテとともに解説の文章を書いていくのである。

編集作業は T さんの自宅で午後 6 時過ぎから朝方まで。全てが初めてのことばかり。ほとんど「弟子」状態で、毎晩ぼろくそに怒鳴られまくっていた。「そもそも、どうしたい?」、「ふだんテレビを見ながら何も考えないのか?」、「こんな言葉遣いでは伝わらない!」、しまいに「そんなドンくさいやつはいらない。帰れ!」。15 分の映像、完成まで 3 ヶ月ちょっと。フィルムを切り貼りし、最後に BGM を入れて完成したときには「つくった!」という高揚感よりも「終わった」という安堵感。会社からは完成まで出社に及ばずとのお達しがあったので、これでもうやく会社に行けるという変な「ホッと」感。そのときの作業では、「身を削る」思いだけではなく実際に 3kg ほど体重が減ったのだから、「身を削った」のだった。

この後も「さくら」という会社の技術 PR や公園工事の記録もつくった。今になって考えると、技術屋だけをやっていたら経験することがない多くのことを学んだのだと思う。耳から入る言葉が理解できるように書く、見えているものを言葉で説明する必要はない、何を伝えたいかを考え全体の流れをつくる、絵コンテを描く、きれいなものだけを映したら何がきれいなかわからない。まるで知らない世界を、怒鳴られ、怒鳴られ、さまよい、トレーニングをさせられたのだった。後に建設コンサルタントに移って、これらがどんなに役に立ったことか…。

3. 家の中に木を植える——アトリウム

まだバブル経済華やかしころのことである。

当時勤めていた造園緑化会社は製紙会社の子会社で、その製紙会社の新工場の構内緑化を担当することになった。計画・設計・施工までを現場責任者として関わることができ、私としては思い出が多い仕事であった。このとき新工場のほかに研修施設も新築することになり、札幌の著名な建築家が設計。緑化屋へのリクエストは「製紙会社の研修施設だから、アトリウムのようにして屋内にシンボリックに木を植えたい」。はてさて、である。

考えていても答えが出るわけではなく、後に私の上司となる造園の専門家 R さんにアドバイスを求めた。「光条件から考えると、ツバキ系ですね」。さっそく知り合いの苗畑に連絡を取り、本州の苗畑を紹介してもらった。さすがに 1 本の木を選びに本州まで出張するわけにはいかず、本社（東京）の会議の際に埼玉県川口市の安行（あんぎょう）にある苗畑を訪れた。200 本近くのヤブツバキを見せてもらったのだが、かの研修施設でシンボルになるような木には出会えず、「申し訳ないが」と辞するそのとき、事務所の前のサザンカが目に入った。樹高 5m・胸高直径 16cm・枝張 3m 程度の 1 本立ち。

「こういうのが欲しいのですが…」

「いや、これは祖父の代に植えたもので、売り物ではないので…」

「いや、そこを何とか」

という問答を繰り返した後、とうとう売ってもらえ

ることになった。当然向こうの言い値である。当時携帯電話もなく、事務所から電話を借りて上司に「こういう値段なのです、買ってもいいですか」という伺いを立てるわけにもいかず、1本数十万という木を即決して帰ってきた。確かその年の6月のことである。

植栽時期は11月中旬、北海道では越冬が難しい樹種なので建物ができてからでないと植えられない。室内に植える限定条件と、工程から逆算してサザンカの処理をしてもらう。入り口の大きさは樹木の搬入を前提としたものではなく、開口部の大きさが限られていることから枝すきと絞り、クレーンなどの重機類を使用できないことから根鉢を極力詰める、さらに函館の倉庫での約2ヶ月の馴化期間を考慮する、等々である。ところで、屋内にそのような大きさの木を植えたことがある人間は私も含めスタッフの中には誰もいない。植える1ヶ月前ほどから毎晩スタッフ間で侃々諤々の議論。搬入方法は？重量は？据え方は？

とうとうその日がやってきた。搬入は結局「コロ」。板の上にサザンカを寝せて載せ、板の下には丸太を敷いてコロにする。搬入口の反対側にも開口部があったので、外にウィンチ付きブルドーザを配してワイヤーでサザンカを引く。けっこう原始的な方法である。屋内にはビデ足場を組んで3トンまで吊り下げられるチェンブロックを用意。植穴までサザンカを引いたら一気にチェンブロック引き上げ立て込む。ドサツという感じでサザンカが立つ。「枝振りが…。もうちょっと回してください」という建築事務所からの要望。「ごめんなさい、これで精一杯。あとは剪定で仕立てますから」と、これで完了。

落成式で建築事務所のM先生は「娘を嫁に出すようで…」と挨拶されていたが、私はつつい陰で「どら娘を嫁にもらってしまったかも…」と一人つぶやいていた。

「どら娘」、その後多くの方々が手をかけてくださったおかげで植栽から25年経った今でも元気に生育している。毎年の剪定のほか、灌水・通風や植栽基盤の補修等屋外に植えた場合よりも実に手がかか



図 研修施設の概観と修景イメージ

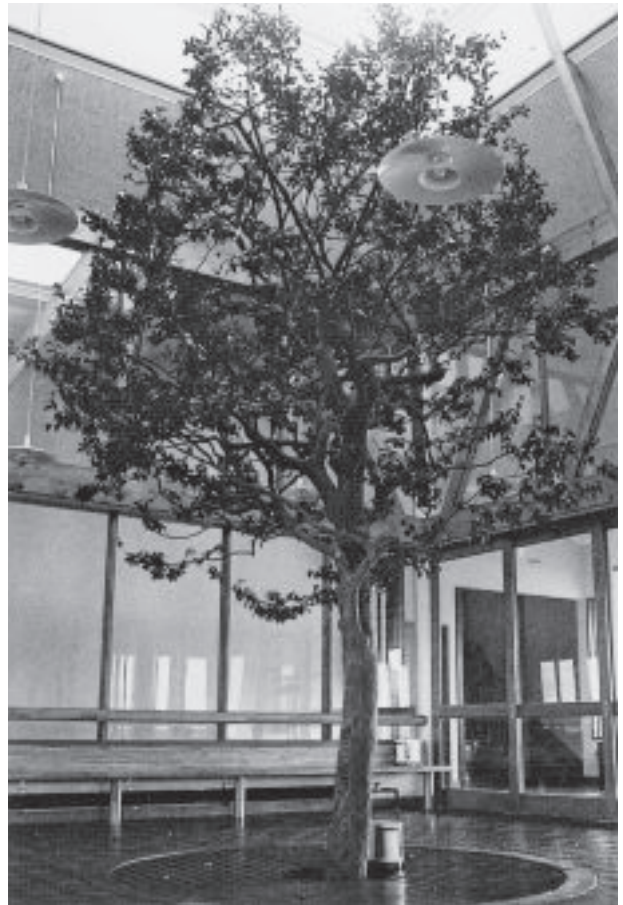


写真 植栽直後のサザンカ¹⁾

る。生みの親にはなったけれど育ての親はしていないのでちょっと気が引けるが、自分が手がけた木が元気に育っていくのを見ることが緑化屋の幸せだと思っている。

このサザンカの植栽には後日談がある。当時、日本建築学会北海道支部では流行の兆しがあった「透明天蓋空間(アトリウム)」に関する研究委員会を設置して積雪寒冷地のアトリウムの意義について討議していた。この植栽を知った、研究委員会主査である北大建築工学科のE先生に誘われ、学会員ではなかったが、私もその研究会のメンバーとして議論に加わるようになった。この結果は報告書としてまとめられ、さらに北大図書刊行会から「積雪寒冷型アトリウムの計画と設計」として出版された。私はそ

の一部「アトリウムと植生」を担当したのだが、これが自分の原稿が出版される初めての体験となった。そういう意味でも室内への植栽は「初」づくしだった。

4. 木が枯れるわけ

緑化屋の幸せは…、と先に書いたが、そこに至らなかったことは実に多々ある。この原稿、ほんとうはここに主眼を置いて書くつもりだったのだが、つい自分の思い出話になってしまった。

なぜ植えた木が枯れてしまったのかということは、枯れ補償がつきまとうので施工屋時代にはたいへんな問題だった。金銭的な問題だけではなく、信用問題にもなる。植栽技術が劣っていたのか、それともほかに原因があるのか。うまくいかなかったときには、いいわけも含めて、いつも省みる必要があった。

なぜ枯れたか、残念ながら個人的なエピソードの積み重ねでしかないのだが、次のようなことが原因であることが多かった。

- ①植え方がヘタ：深植えで根が窒息状態になり枯死したり、根元の踏み固めが弱く倒伏して根が露出したため乾燥で枯死したりする。
- ②植栽時期が不適切：新葉がちょうど開葉している最中に木を動かし、乾燥から枯れる。また寒冷少雪地帯で秋に針葉樹を植え、春先の寒風害や寒乾害から枯死する。
- ③基盤造成のまずさ：私が関わっている現場は自然状態の生育基盤に木を植えることは少なく、盛土上に植える場合が多い。まず硬い。盛土の出来型を基準とするために木の根の成長には硬すぎる場合が圧倒的に多く、枯れはしないが木が伸びない。それと排水不良。根腐れが生じて、衰弱しやがて枯れる。

などなど。

野村克也さんは「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし²⁾」と言ったそうだが、木が枯れた理由を探ると同じ事が言える。「枯れに不思議の枯れなし」。

植えた木が枯れるにはそれ相応の要因があるのだ

から、その要因を一つずつ排除していけば木を枯らすことは少なくなると考える。ただ、失敗事例を記録に残すことはなかなか難しく、その情報の伝達を怠っているから同じような間違いを何回も繰り返しているといえる。この原稿を書きながら思うのだが、我がことでもどうしてもうまくいった話だけになり、失敗事例を滔々と書き連ねるのは難しい。もうそろそろ真剣に今まで生きてきた社会への恩返しを考えなければならない時期に来ているのだから、失敗事例をまとめておくことが義務のような気がする。とりあえず今回は課題として残しておこう。

5. これから

いろいろなことをさも一人の力でこなしてきたように書いてきたが、実に多くの方々に教え導かれながらここまで来たのだと思う。深く感謝したい。足を向けては寝られない人たちがあちこちに大勢いるので、まじめに考えると立って寝なくてはならない。と、これは冗談だが、何らかの形で恩返しはしなければならないと思っている。ただし、お世話になった方々にではなく、これからの人たちへ。先に課題とした「失敗譚」、これを伝えていくことで恩返しになるのではないかと考えている。そういう意味ではまだまだ「プロジェクトX」として終局を迎えるわけにはいかず、「プロジェクトM」くらいの気持ちでいたいと思う。

参考文献

- 1) 絵内正道 編著, 1995, 積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計, グラビア 21p, 189pp, 北海道大学図書刊行会より転載(撮影, 孫田 敏)
- 2) 野村克也の名言 格言
<http://systemincome.com/main/kakugen/tag/%E9%87%8E%E6%9D%91%E5%85%8B%E4%B9%9F>

孫田 敏(そんだ さとし)

技術士(建設部門)

有限会社アークス

